渡辺春美著
『国語科授業活性化の探究　文学教材を中心に』

本書は、文学教材の授業の活性化という課題に取り組んだ実践研究の報告である。本書は、七章から成っている。

第一章「国語科授業活性化のために」では、教材、指導、過程、読み、話す力、聞く力を高める、ということについての工夫が述べられている。第二章「文学教材の研究と開発」では、『羅生門』と『ある金曜日の朝』（ラングストン・ヒューズ）の二作品が取り上げられている。『羅生門』では、「教えたい・語りたい」ものを生徒の「学びたい」ものに転化するために発問中心の指導案が示されている。第三章から第四章までは「授業活性化の試み」として、『いなかぶり』（島尾敏雄）、『山月記』（中島敦）、『舞姫』（森鷗外）の作品を取り上げており、多角的な授業活性化の試みが述べられている。第七章「国語科授業活性化の課題」では、今後の授業活性化の在り方を見定めるために、主な研究課題をあげて本書のまとめとしている。

（A5判、三〇九ページ、平成5年八月一日、溪水社、三六〇五円）

（上野　珠貴）